

えだまめの早出し作型

圃試：野菜花き部 南部分場

農試：技術部 県南分場

県北分場

1. 背景とねらい

本県のえだまめは日本一をめざし生産振興が図られ、作付が急速に増加している。

今後、主産地としての評価を高めるために作付拡大とともに、良質のえだまめを長期間継続出荷することが必要であり、現行の作型の拡大が求められている。

そこで、ハウスの有効利用等によって早出し技術を検討した結果、成果が得られたので参考に供する。

2. 技術の内容

1) 地域別の早出し作型は次のとおりである。

作型		3月	4	5	6	7	8	収量 kg/10a	品種
県 中 南 部	ハウスの有効利用	○	●	▲	□			700	サッポロミドリ
	移							"	"
	"							"	"
	"							"	"
	直							700 ~1000	(サッポロミドリ ふくら
	"							"	"
トネル	"							700 ~1000	"
	"							"	"
(参) 露地 マルチ	"							600	サッポロミドリ
県 北 部	ハウスの有効利用							600	(サッポロミドリ ふくら
	直							600	サッポロミドリ
	移								
	トネル							700	サッポロミドリ
直									
(参) 露地 マルチ	直							600	"

移：移植 直：直播 ○：播種 ●：移植 ▲：開花期 □：収穫期

- 2) 県中南部ではハウス利用によって、品種、移植を組合せ3月下旬～4月上旬播種で6月下旬からの出荷が可能で、慣行の露地栽培に比べ収穫期は40日前後早まる。
ハウス直播の場合は4月上中旬播種で6月下旬～7月上旬の出荷ができ、収量が高い。
トンネル栽培はハウスより収穫が10日遅く7月中旬からの出荷となる。
県北部ではハウス又はトンネル栽培の4月中下旬播種で収穫期は県南部より7日ほど遅れるが、7月出荷ができる。
- 3) 品種は直播ではサッポロミドリ、ふくらでよいが、移植の場合は品質、食味の点でサッポロミドリが適する。
- 4) 適応地域 県中南部内陸及び沿岸、県北平坦部

3. 指導上の留意事項

- 1) 早出し作型の収量性は地域によるふれはあるが700～1,000 kg/10a が期待でき、慣行の露地栽培に比べ同等ないし勝る。この場合の品質も問題点はとくになく、直播では慣行露地栽培よりも優れる。
- 2) 移植栽培は直播に比べ収穫期が7日程度早まることから、6月下旬～7月上旬の早期出荷か、水稲育苗跡ハウス等の利用に適する。
- 3) 移植栽培での育苗は水稲育苗箱、野菜育苗箱を用い、初生葉期に移植する。
- 4) ハウス、トンネル栽培とも生育を良くするためポリマルチ栽培を行う。
フィルムは9215Bを用い、栽植本数は10a 当り1万本程度とする。
- 5) 施肥量は窒素6～10kg/10a の多肥とする。
- 6) ハウス利用では温度管理と水管理に十分注意する。夜間は保温（ポリフィルムとシルバーフィルムの二重トンネル被覆）につとめ、日中は30℃以上にならないように換気する。
また、土壌が乾燥しやすいので播種、移植前に灌水し、土壌水分が十分な状態でポリマルチを張り、その後も適宜灌水し、pF2.0～2.2 を目標に管理する。
- 7) トンネル栽培では霜害防止と生育促進のためポリトンネル（換気フィルム）内に不織布をべたがけする。
不織布は5月中下旬に除去するが、ポリトンネルはこれより10～15日遅く除去する。
- 8) ハウス栽培での収益性を高めるために、ほうれんそう、ストック等他作物との組合せや水稲育苗跡地の有効利用を図る。
- 9) ふくらの開花期、収穫期はハウス早播（3月下旬～4月上旬）ではサッポロミドリ並に早まる。